

北守将軍と三人兄弟の医者

宮沢賢治

青空文庫

一、三人兄弟の医者

むかしラユーといふ首都に、兄弟三人の医者がある。いちばん上のリンパーは、普通の人の医者だった。その弟のリンパーは、馬や羊の医者だった。いちばん末のリンパーは、草だの木だの医者だった。そして兄弟三人は、町のいちばん南にあたる、黄いろな崖がけのとつばなへ、青い瓦わはらの病院を、三つならべて建ててゐて、てんでに白や朱の旗を、風にはたばたうるし云いはせてゐた。

坂のふもとで見ると、漆うるしにかぶれた坊さんや、少しびつこをひく馬や、萎しをれかかった牡丹ぼたんの鉢はちを、車につけて引く園丁や、

いんこを入れた鳥籠とりかごや、次から次とのぼつて行つて、さて坂上に行き着くと、病氣の人は、左のリンパー先生へ、馬や羊や鳥類は、中のリンパー先生へ、草木をもつた人たちは、右のリンパー先生へ、三つにわかれてはひるのだつた。

さて三人は三人とも、実に医術もよくできて、また仁心じんしんも相当あつて、たしかにもはや名医の類であつたのだが、まだいゝ機を会がなかつたために別に位もなかつたし、遠くへ名前も聞えなかつた。ところがたうとうある日のこと、ふしぎなことが起つてきた。

二、北守將軍ソンバーユ

ある日のちやうど日の出ごろ、ラユーの町の人たちは、はるか
な北の野原の方で、鳥か何かがたくさん群れて、声をそろへて鳴
くやうな、をかしの音を、ときどき聴いた。はじめは誰だれも気にか
けず、店を掃いたりしてゐたが、朝めしすこしすぎたころ、だん
だんそれが近づいて、みんな立派なチャルメラや、ラツパの音だ
とわかつてくると、町ぢゆうにはかにざわざわした。その間には
ぱたぱたいふ、太鼓の類の音もする。もう商あきうど人も職人も、仕事
がすこしも手につかない。門を守つた兵隊たちは、まづ門をみな
しつかりとぎし、町をめぐつた壁の上には、見張りの者をならべ
て置いて、それからお宮へ知らせを出した。

そしてその日の午ひるちかく、ひづめの音よろひや鎧よろひの気配、また号令の
声もして、向ふはすつかり、この町を、囲んでしまつた模様であ
つた。

番兵たちや、あらゆる町の人たちが、まるでどきどきやりなが
ら、矢を射る孔あなからのぞいて見た。壁の外から北の方、まるで雲う
霞んかの軍勢だ。ひらひらひかる三角旗や、ほこがさながら林のやう
だ。ことになんとも奇体なことは、兵隊たちが、みな灰いろでほ
さぼさして、なんだかけむりのやうなのだ。するどい眼めをして、
ひげが二いろまつ白な、せなかのまがつた大将が、尻尾しつぽが箒ほうきのか
たちになつて、うしろにぴんとのびてゐる白馬はくばに乗つて先頭に立
ち、大きな剣を空にあげ、声高々と歌つてゐる。

「北守將軍ソンバーユーは

いま塞^{さいぐわい}外の砂漠^{さばく}から

やつとのことで戻つてきた。

勇ましい凱旋^{がいせん}だと云ひたいが

実はすつかり参つて来たのだ

とにかくあすこは寒^{ところ}い処^{ところ}さ。

三十年といふ黄いろなむかし

おれは十万の軍勢をひきゐ

この門をくぐつて威張つて行つた。

それからどうだもう見るものは空ばかり

風は乾いて砂を吹き

雁^{かり}さへ干せてたびたび落ちた

おれはその間馬でかけ通し

馬がつかれてたびたびペタンと座り

涙をためてはじつと遠くの砂を見た。

その度ごとにおれは鎧^{よろひ}のかくしから

塩をすこうし取り出して

馬に嘗^なめさせては元氣をつけた。

その馬も今では三十五歳

五里かけるにも四時間かゝる

それからおれはもう七十だ。

とても帰れまいと思つてゐたが

ありがたや敵が残らず脚氣かくけで死んだ

今年の夏はへんに湿気が多かつたでな。

それに脚氣の原因が

あんまりこつちを追ひかけて

砂を走つたためなんだ

さうしてみればどうだやつぱり凱旋だらう。

殊にも一つほめられていゝことは

十万人もでかけたものが

九万人まで戻つて来た。

死しんだやつらは氣の毒だが

三十年の間には

たとへいくさに行かなくなつて

一割ぐらゐは死ぬんぢやないか。

そこでラユーのむかしのともよ

またこどもらよきやうだいよ

北守將軍ソンバーユート

その軍勢が歸つたのだ

門をあけてもいゝではないか。」

さあ城壁のこつちでは、沸わきたつやうな騒動だ。うれしまぎれに泣くものや、両手をあげて走るもの、じぶんで門をあげようと、番兵たちに叱しかられるもの、もちろん王のお宮へは使が急いで走つて行き、城門の扉とはぴしやんと開あいた。おもての方の兵隊

たちも、もううれしくて、馬にすがつて泣いてゐる。

顔から肩から灰いろの、北守將軍ソンバーユーは、わぎとくしやくしや顔をしかめ、しづかに馬のたづなをとつて、まつすぐを向いて先登に立ち、それからラツパや太鼓の類、三角ばたのついた槍やり、まつ青に錆さびた銅のほこ、それから白い矢をしよつた、兵隊たちが入つてくる。馬は太鼓に歩調を合せ、殊にもさきのソング軍の白馬しろうまは、歩きたんびに膝ひざがぎちぎち音がして、ちやうどひやうしをとるやうだ。兵隊たちは軍歌をうたふ。

「みそかの晩とついたちは

砂漠さばくに黒い月が立つ。

西と南の風の夜は

月は冬でもまつ赤だよ。

雁がんが高みを飛ぶときは

敵が遠くへ遁にげるのだ。

追はうと馬にまたがれば

にはかに雪がどしやぶりだ。」

兵隊たちは進んで行つた。九万の兵といふものはたゞ見ただけでもぐつたりする。

「雪の降る日はひるまでも

そらはいちめんまつくらで

わづかに雁の行くみちが

ぼんやり白く見えるのだ。

砂がこごえて飛んできて

枯れたよもぎをひっこぬく。

抜けたよもぎは次々と

都の方へ飛んで行く。」

みんなは、みちの両側に、垣かきをきづいて、そろつとならび、泪なみだを流してこれを見た。

かくて、バーユー將軍が、三町ばかり進んで行つて、町の広場についたとき、向ふのお宮の方角から、黄いろな旗がひらひらして、誰かたれこつちへやつてくる。これはたしかに知らせが行つて、王から迎ひが来たのである。

ソン將軍は馬をとめ、ひたひに高く手をかざし、よくよくそれ

を見きはめて、それから俄かに一礼し、急いで、馬を降りようとした。ところが馬を降りれない、もう將軍の両足は、しつかり馬の鞍くらにつき、鞍はこんどは、がつしりと馬の背中にくつついて、もうどうしてもはなれない。さすが豪氣の將軍も、すつかりあわてて赤くなり、口をびくびく横に曲げ、一生けん命、はね下りようとするので、どうにもからだがうごかなかつた。あゝ、これこそじつに將軍が、三十年も、国境の空氣の乾いた砂漠さばくのなかで、重いつとめを肩に負ひ、一度も馬を下りないために、馬とひとつになつたのだ。おまけに砂漠のまん中で、どこにも草の生えるところがなくつたために、多分はそれが將軍の顔を見付けて生えたのだらう。灰いろをしたふしぎなものかももう將軍の顔や手や、ま

るでいちめん生えてゐた。兵隊たちにも生えてゐた。そのうち使ひの大臣は、だんだん近くやつて来て、もうまつさきの大きな槍やりや、旗のしるしも見えて来た。

將軍、馬を下りなさい。王様からのお迎ひです。將軍、馬を下りなさい。向ふの列で誰かだれ云ふ。將軍はまた手をばたばたしたが、やつぱりからだがはなれない。

ところが迎ひの大臣は、鮎ふなよりひどい近眼だつた。わざと馬から下りないで、両手を振つて、みんなに何か命令してると考へた。「謀叛むほんだな。よし。引き上げろ。」さう大臣はみんなに云つた。そこで大臣一行は、くるつと馬を立て直し、黄いろな塵ちりをあげながら、一目散に戻つて行く。ソン將軍はこれを見て肩をすぼめて

ため息をつき、しばらくぼんやりしてゐたが、俄かにうしろを振り向いて、軍師の長を呼び寄せた。

「おまへはすぐに鎧よろひを脱いで、おれの刀と弓をもち、早くお宮へ行つてくれ。それから誰かにかう云ふのだ。北守將軍ソンバーユ―は、あの国境の砂漠の上で、三十年のひるも夜も、馬から下りるひまがなく、たうとうからだが鞍につき、そのまた鞍が馬について、どうにもお前へ出られません。これからお医者に行きまして、やがて参内いたします。かうていねいに云つてくれ。」

軍師の長はうなづいて、すばやく鎧よろひと兜かぶとを脱ぎ、ソン將軍の刀をもつて、一目散にかけて行く。ソン將軍はみんなに云つた。

「全軍しづかに馬をおり、兜をぬいで地に座れ。ソン大將はたゞ

今から、ちよつとお医者へ行つてくる。そのうち音をたてないで、じいつとやすんでゐてくれい。わかつたか。」

「わかりました。將軍」兵隊共は声をそろへて一度に叫ぶ。將軍はそれを手で制し、急いで馬に鞭むちうつた。たびたびぺたんさばくと砂漠に寝た、この有名な白馬しろうまは、こゝで最後の力を出し、がたがたたがた鳴りながら、風より早くかけ出した。さて將軍は十町じゅうばかり、夢中で馬を走らせて、大きな坂の下に来た。それから俄にはにかう云つた。

「上手な医者はいつただれい誰だ。」

一人の大王が返事した。

「それはリンパー先生です。」

「そのリンパーはどこに居る。」

「すぐこの坂のま上です。あの三つある旗のうち、一番左でござ
います。」

「よろしい、しゆう。」と將軍は、例の白馬はくばに一鞭くれて、一氣
に坂をかけあがる。大工はあとでぶつぶつ云つた。

「何だ、あいつは野蠻なやつだ。ひとからものを教はつて、よろ
しい、しゆう」とはいつたいなんだ。」

ところがバーユー將軍は、そんなことには構はない。そこらをつ
うろうろあるいてゐる、病人たちをはね越えて、門の前まで上つ
てゐた。なるほど門のはしらには、小医リンパー先生と、金看板
がかけてある。

三、リンパー先生

さてソンバーユー將軍は、いまやリンパー先生の、大玄関を乗り切つて、どしどし廊下へ入つて行く。さすがはリンパー病院だ、どの天井も室の扉も、^{へや}高さ^とが二丈ぐらゐある。

「医者はどこかね。診てもらひたい。」ソン將軍は号令した。

「あなたは一体何ですか。馬のまんまで入るとは、あんまり乱暴すぎませう。」^{もえぎ}萌黄の長い服を着て、頭を剃つた一人の弟子が、馬のくつわをつかまへた。

「おまへが医者^のリンパーか、早くわが輩の病気を診ろ。」

「いゝえ、リンパー先生は、向ふの室に居られます。けれどもご用がおありなら、馬から下りていたゞきたい。」

「いゝや、そいつができんのぢや。馬からすぐに下りれたら、今ごろはもう王様の、前へ行つてた筈はずなんぢや。」

「ははあ、馬から降りられない。そいつは脚の硬直だ。そんならいゝです。おいでなさい。」

弟子は向ふの扉をあけた。ソソ將軍はぱかぱかと馬を鳴らしてはひつて行つた。中には人がいつぱいで、そのまん中に先生らしい、小さな人が床しやうぎ几ぎに座り、しきりに一人の眼を診てゐる。

「ひとつこつちをたのむのぢや。馬から降りられないでなう。」
さう將軍はやさしく云つた。ところがリンパー先生は、見向きも

しないし動きもしない。やっぱりじつと眼を見てゐる。

「おい、きみ、早くこつちを見んか。」將軍が怒鳴り出したので、病人たちはびくつとした。ところが弟子がしづかに云つた。

「診るには番がありますからな。あなたは九十六番で、いまは六人目ですから、もう九十人お待ちなさい。」

「黙れ、きさまは我輩に、七十二人待てつと云ふか。おれを誰だだれと考へる。北守將軍ソンバーユーだ。九万人もの兵隊を、町の広場に待たせてある。おれが一人を待つことは七万二千の兵隊が、向ふの方で待つことだ。すぐ見ないならけちらすぞ。」將軍はもう鞭むちをあげ馬はいきはねあがり、病人たちは泣きだした。ところがりんぱー先生は、やっぱりびくともしてゐない、てんでこつ

ちを見もしない。その先生の右手から、黄の綾あやを着た娘が立つて、花くわびん瓶びんにさした何かの花を、一枝とつて水につけ、やさしく馬につきつけた。馬はぱくつとそれを噛かみ、大きな息を一つして、ペたんよつと四つ脚を折り、今度はごうごういびきをかいて、首を落してねむつてしまふ。ソン將軍はまごついた。

「あ、馬のやつ、又参つたな。困つた。困つた。困つた。」と云つて、急いで鎧よろひのかくしから、塩の袋をとりだして、馬に喰くべさせようとする。

「おい、起きんかい。あんまり情けないやつだ。あんなにひどく難儀して、やつと都に帰つて来ると、すぐ気がゆるんで死ぬなんて、ぜんたいどういふ考なのか。こら、起きんかい。起きんかい。起きんかい。」

しつ、ふう、どう、おい、この塩を、ほんの一口たべんかい。」
それでも馬は、やつぱりぐうぐうねむつてゐる。ソン將軍はたう
とう泣いた。

「おい、きみ、わしはとにかくに、馬だけどうかみてくれたまへ。
こいつは北の国境で、三十年もはたらいたのだ。」

むすめはだまつて笑つてゐたが、このときリンパー先生が、い
きなりこつちを振り向いて、まるで將軍の胸底から、馬の頭も見
徹とほすやうな、するどい眼をしてしづかに云つた。

「馬はまもなく治ります。あなたの病気をしらべるために、馬を
座らせただけです。あなたはそれで向ふの方で、何か病気をしま
したか。」

「いゝや、病氣はしなかつた。病氣は別にしなかつたが、狐きつねのた
めに欺だまされて、どうもときどき困つたぢや。」

「それは、どういふ風ですか。」

「向ふの狐はいかんのぢや。十万近い軍勢を、たゞ一ぺんに欺す
んぢや。夜に沢山火をともしたり、昼間いきなり破漠さばくの上に、大
きな海をこしらへて、城や何かも出したりする。全くたちが悪い
んぢや。」

「それを狐きつねがしますのですか。」

「狐とそれから、砂鶺サコツぢやね、砂鶺というて鳥なんぢや。こいつ
は人の居をらないときは、高い処を飛んでゐて、誰だれかを見ると試し
に来る。馬のしつぽを抜いたりね。目をねらつたりするもんで、

こいつがでたらもう馬は、がたがたふるへてようあるかんね。」

「そんなら一ペン欺だまされると、何日ぐらゐでよくなりですか。」

「まあ四日ぢやね。五日のときもあるやうぢや。」

「それでああなたは今までに、何べんぐらゐ欺だまされました？」

「ごく少くて十ペンぢやらう。」

「それではお尋ねいたします。百と百とを加へると答はいくらになりますか。」

「百八十ぢや。」

「それでは二百と二百では。」

「さやう、三百六十だらう。」

「そんならも一つ伺うかがひますが、十の二倍は何ほどですか。」

「それはもちろん十八ぢや。」

「なるほど、すっかりわかりました。あなたは今でもまだ少し、砂漠さばくのためにつかれてゐます。つまり十パーセントです。それではなほしてあげませう。」

パー先生は両手をふつて、弟子にしたくを云ひ付けた。弟子は大きな銅鉢どうばちに、何かの薬をいっぱい盛つて、布巾ふきんを添へて持つて来た。ソン將軍は両手を出して鉢をきちんと受けとつた。パー先生は片袖かたそでまくり、布巾に薬をいっぱいひたし、かぶとの上からぎぶぎぶかけて、両手でそれをゆすぶると、兜かぶとはすぐにすぱりととれた。弟子がも一人、もひとつ別の銅鉢へ、別の薬をもつてきた。そこでリンパー先生は、別の薬でじやぶじやぶ洗しづくふ。雫は

まるでまつ黒だ。ソン將軍は心配さうに、うつむいたまゝ訊いてゐる。

「どうかね、馬は大丈夫かね。」

「もうぢきです。」とパー先生は、つゞけてじやぶじやぶ洗つてゐる。雫がだんだん茶いろになつて、それからうすい黄いろになつた。それからたうとうもう色もなく、ソン將軍の白髪は、熊よくまり白く輝いた。そこでリンパー先生は、布巾を捨てて両手を洗ひ、弟子は頭と顔を拭ふく。將軍はぶるつと身ぶるひして、馬にきちんと起きあがる。

「どうです、せいせいしたでせう。ところで百と百とをたすと、答はいくらになりますか。」

「もちろんそれは二百だらう。」

「そんなら二百と二百とたせば。」

「さやう、四百にちがひない。」

「十の二倍はどれだけですか。」

「それはもちろん二十ぢやな。」 さつきのことは忘れた風で、ソ
ン將軍はけろりと云ふ。

「すつかりおなほりになりました。つまり頭の目がふさがつて、一
割いけなかつたのですな。」

「いやいや、わしは勘定などの、十や二十はどうでもいいんぢや。
それは算師がやるでなう。わしは早速この馬と、わしをはなして
もらひたいんぢや。」

「なるほどそれはあなたの足を、あなたの服と引きはなすのは、すぐ私に出来るです。いやもう離れてゐる筈はずです。けれども、ずぼんが鞍くらにつき、鞍がまた馬についたのを、はなすといふのは別ですな。それはとなりで、私の弟がやつてゐますから、そつちへおいでいただきます。それにいつたいこの馬もひどい病氣にかかつてゐます。」

「そんならわしの顔から生えた、このもじやもじやはどうぢやらう。」

「そちらもやつぱり向ふです。とにかくひとつとなりの方へ、弟子をお供に出しませう。」

「それではそつちへ行くとしよう。ではさやうなら。」

さつきの白いきものをつけた、むすめが馬の右耳に、息を一つ吹き込んだ。馬はがばつとはねあがり、ソン將軍は俄かに背が高くなる、將軍は馬のたづなをとり、弟子とならんで室を出る。それから庭をよこぎつて厚い土堀の前に来た。小さな潜りがあいてゐる。

「いま裏門をあけさせませう。」助手は潜りを入つて行く。

「いゝや、それには及ばない。わたしの馬はこれぐらゐ、まるで何とも思つてやしない。」

將軍は馬にむちをやる。

ぎつ、ばつ、ふう。馬は土堀をはね越えて、となりのリンプー先生の、けしのはたけをめちやくちやに、踏みつけながら立つて

ゐた。

四、馬医リンブー先生

ソン將軍が、お医者の弟子と、けしの畑をふみつけて向ふの方へ歩いて行くと、もうあつちからもこつちからも、ぶるるるふうといふやうな、馬の仲間の声がする。そして二人が正面の、巨おほきな棟むねにはひつて行くと、もう四方から馬どもが、二十疋びきもかけて来て、蹄ひづめをここと鳴らしたり、頭をぶらぶらしたりして、將軍の馬に挨拶あいさつする。

向ふでリンブー先生は、首のまがつた茶いろの馬に、白い葉を

塗つてゐる。さつきの弟子が進んで行つて、ちよつと何かをさゝやくと、馬医のリンプー先生は、わらつてこつちをふりむいた。巨きな鉄の胸むな甲あてを、がつしりはめてゐることは、ちやうどやつぱり鎧よろひのやうだ。馬にけられぬためらしい。將軍はすぐその前へ、じぶんの馬を乗りつけた。

「あなたがリンプー先生か。わしは將軍ソンバーユーぢや。何分ひとつたのみたい。」

「いや、その由を伺うかがひました。あなたのお馬はたしか三十九ぐらゐですな。」

「四捨五入して、さうぢや、やつぱり三十九ぢやな。」

「ははあ、たゞいま手術いたします。あなたは馬の上に居て、す

こし煙いかしれません。それをご承知くださいますか。」

「煙い？ なんのどうして煙ぐらゐ、砂漠で風の吹くときは、一分間に四十五以上、馬を跳躍させるんぢや。それを三つも、やすんだら、もう頭まで埋まるんぢや。」

「ははあ、それではやりませう。おい、フーシユ。」プー先生は弟子を呼ぶ。弟子はおじぎを一つして、小さな壺をもつて来た。

プー先生は蓋をとり、何か茶いろな薬を出して、馬の眼に塗りつけた。それから「フーシユ」とまた呼んだ。弟子はおじぎを一つして、となりの室へ入つて行つて、しばらくごとごとしてゐたが、まもなく赤い小さな餅を、皿にのつけて歸つて来た。先生はそれをつまみあげ、しばらく指ではさんだり、匂をかいたりしてゐた。

が、何か決心したらしく、馬にぱくりと喰べさせた。ソン將軍は、その白馬しろうまの上に居て、待ちくたびれてあくびをした。すると俄にはかに白馬しろうまは、がたがたがたふるへ出しそれからからだ一面に、あせとけむりを噴き出した。プー先生はこはさうに、遠くへ行つてながめてゐる。がたがたがた鳴りながら、馬はけむりをつけて噴いた。そのまた煙が無暗むやみに辛からい。ソン將軍も、はじめは我慢してゐたが、たうとう両手を眼にあてて、ごほんごほんせきををした。そのうちだんだんけむりは消えてこんどは、汗が滝よりひどくながれだす。プー先生は近くへよつて、両手をちよつと鞍くらにあて、二つつばかりゆすぶつた。

たちまち鞍はすぱりとはなれ、はずみを食つた將軍は、床にす

とんと落された。ところがさすが將軍だ。いつかきちんと立つてゐる。おまけに鞍と將軍も、もうすつかりとはなれてゐて、將軍はまがつた両足を、両手でぱしやぱしや叩たたいたし、馬は俄かに荷がなくなつて、さも見当がつかないらしく、せなかをゆらゆらゆすぶつた。するとバーユー將軍はこんどは馬のはうきのやうなしつぽを持つて、いきなりぐつと引つ張つた。すると何やらまつ白な、尾の形した塊が、ごとりと床にころがり落ちた。馬はいかにも軽さうに、いまは全く毛だけになつたしつぽを、ふさふさ振つてゐる。弟子が三人集つて、馬のからだをすつかりふいた。

「もういゝだらう。歩いてごらん。」

馬はしづかに歩きだす。あんなにぎちぎち軋きしんだ膝ひざがいまでは

すつかり鳴らなくなつた。プー先生は手をあげて、馬をこつちへ呼び戻し、おじぎを一つ將軍にした。

「いや謝しますぢや。それではこれで。」將軍は、急いで馬に鞍を置き、ひらりとそれにまたがれば、そこらあたりの病氣の馬は、ひんひん別れの挨拶あいさつをする。ソン將軍は室を出て堀ほりをひらりと飛び越えて、となりのリンポー先生の、菊のはたけに飛び込んだ。

五、リンポー先生

さてもリンポー先生の、草木を治すその室みやは、林のやうなものだつた。あらゆる種類の木や花が、そこらいつぱいならべてあつ

て、どれにもみんな金だの銀の、おほ巨きな札がついてゐる。そこを、
バーユー將軍は、馬から下りて、ゆつくりと、ポー先生の前へ行
く。さつきの弟子がさきまはりして、すつかりはな談してゐたらしく、
ポー先生は薬の函はこと大きな赤い団扇うちはをもつて、ごくうやうやしく
待つてゐた。ソン將軍は手をあげて、

「これぢや。」と顔を指さした。ポー先生は黄いろな粉を、薬函
から取り出して、ソン將軍の顔から肩へ、もういつぱいにふりか
けて、それから例のうちはをもつて、ばたばたばた扇ぎ出す。
するとたちまち、將軍の、顔ぢゆうの毛はまつ赤に変わり、みんな
ふはふは飛び出して、見てゐるうちに將軍は、すつかり顔がつる
つるなつた。じつにこのとき將軍は、三十年ぶりにつこりした。

「それではこれで行きますぢや。からだもかるくなつたでなう。」
もう將軍はうれしくて、はやてのやうに室を出て、おもての馬に
飛び乗れば、馬はたちまち病院の、巨きな門を外に出た。あとか
ら弟子が六人で、兵隊たちの顔から生えた灰いろの毛をとるため
に、薬の袋とうちはをもつて、ソン將軍を追ひかけた。

六、北守將軍せん仙人となる

さてソンバーユー將軍は、ポー先生の玄関を、光のやうに飛び
出して、となりのリンプー病院を、はやてのごとく通り過ぎ、次
のリンパー病院を、斜めに見ながらも一散に、さつきの坂をか

け下りる。馬は五倍も速いので、もう向ふには兵隊たちの、やすんでゐるのが見えてきた。兵隊たちは心配さうにこつちの方を見てゐたのだが、思はず歓呼の声をあげ、みんな一緒に立ちあがる。そのときお宮の方からはさつきの使ひの軍師の長が一目散にかけ来て来た。

「あゝ、王様は、すつかりおわかりになりました。あなたのことをおききになつて、おん涙さへ浮べられ、お出いでをお待ちでございます。」

そこへさつきの弟子たちが、薬をもつてやつてきた。兵隊たちはよろこんで、粉をふつてはばたばた扇ぐ。そこで九万の軍隊は、もう輪りんくわく廓くわくもはつきりなつた。

將軍は高く号令した。

「馬にまたがり、氣をつけいつ。」

みんなが馬にまたがれば、まもなくそこらはしんとして、たつた二疋の遅れた馬が、鼻をぶるつと鳴らしたただけだ。

「前へ進めつ。」太鼓も銅鑼どらも鳴り出して、軍は肅々行進した。

やがて九万の兵隊は、お宮の前の一里の庭に縦じゆうわう横わうちやうど三百人、四角な陣をこしらへた。

ソン將軍は馬を降り、しづかに壇をのぼつて行つて床に額をすりつけた。王はしづかに斯かういつた。

「じつに永らくご苦労だつた。これからはもうこゝに居て、大將たちの大將として、なほ忠勤をはげんでくれ。」

北守將軍ソンバーユーは涙を垂れてお答へした。

「おことばまことに畏かしこくて、何とお答へいたしていゝか、とみに言葉も出いでませぬ。とは云へいまや私は、生きた骨ともいふやうな、役に立たずでございます。砂漠さばくの中に居ました間、どこから敵が見てゐるか、あなどられまいと考へて、いつでもりんと胸を張り、眼を見開いて居りましたのが、いま王様のお前に出て、おほめの詞ことばをいたゞきますと、俄にはかに眼さへ見えぬやう。背骨も曲つてしまひます。何卒なにとぞこれでお暇を願ひ、郷里に歸りたうございます。」

「それでは誰だれかおまへの代り、大将五人の名を挙げよ。」

そこでバーユー將軍は、大将四人の名をあげた。そして残りの

一人の代り、リン兄弟の三人を国のお医者におねがひした。王は早速許されたので、その場でバーユー將軍は、鎧よろひもぬげば兜かぶともぬいで、かさかさ薄い麻を着た。そしてじぶんの生れた村のス山さんの麓ふもとへ歸つて行つて、粟あはをすこうし播まいたりした。それから粟の間引きもやつた。けれどもそのうち將軍は、だんだんものを食はなくなつてせつかくじぶんで播いたりした、粟も一口たべただけ、水をがぶがぶ呑のんでゐた。ところが秋の終りになると、水もさつぱり呑まなくなつて、ときどき空を見上げては何かしやつくりするやうなききたいな形をたびたびした。

そのうちいつか將軍は、どこにも形が見えなくなつた。そこでみんなは將軍さまは、もう仙せん人にんになつたと云つて、ス山の山の

いたゞきへ小さなお堂をこしらへて、あの白馬しろうまは神馬に祭り、あかしや粟をさゝげたり、麻ののぼりをたてたりした。

けれどもこのとき国手になつた例のリンパー先生は、会ふ人ごとくに斯ういつた。

「どうして、バーユー將軍が、雲だけ食つた筈はずはない。おれはバーユー將軍の、からだをよくみて知つてゐる。肺と胃の腑ふは同じでない。きつとどこかの林の中に、お骨があるにちがひない。」
なるほどさうかもしれないと思つた人もたくさんあつた。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十三卷」筑摩書房

1980（昭和55）年3月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年6月30日初版第5刷発行

初出：「児童文学 第一冊」

1931（昭和6）年7月20日発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年9月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北守将軍と三人兄弟の医者

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>